

国語国文学会だより



No. 13

1995. 8

国文学科卒業生の会

国語国文学会 春の総会・研究発表会報告

平成七年度春の総会・研究発表会が、五月二十五日(木)、香雪館二〇二番教室において開催されました。

◆第一部 総会

(1) 挨拶

(2) 学科名変更に伴う会則変更について

(3) 名誉会員推薦について(熊坂敦子先生)

以上・国語国文学会会長 阿蘇瑞枝先生

(4) 奨学金授与

久松潜一賞 学部四年次 渡辺 未知

上村悦子賞 院後期三年次 八木 京子

(5) 国語国文学会委員長挨拶・役員紹介

(学生の方・卒業生の会)

(6) 平成六年度活動報告・決算・監査報告

(7) 平成七年度活動計画・予算案・監査選出

(6)(7)については学生、卒業生より各々報告、説明があり、各案件とも審議、承認されました。卒業生の会では、今年度も好評の文学散歩を企画しています。

(8) 自主ゼミ紹介・報告

学部名称変更に伴う会則改正(次ページ)、熊坂敦子先生の名誉会員への推挙が、全員一致、承認されました。

◆第二部 研究発表会

(1) 山東京山読本考——『驚談伝奇桃花流水』について

博士課程前期33回生 津田 真弓

(2) 『ろおれんぞ』という女性——芥川の宗教観の側面——

博士課程後期一年次 稲田智恵子

(3) 見出しの機能による新聞投書の文章構造

博士課程前期一年次 原 美紀

緻密な考察による発表であり、また活発な質疑応答が行なわれ、充実した発表会でした。

秋季大会・公開講演会のご案内

日時・平成七年十一月二十五日(土) 一時～

講演者 翻訳家 酒井 洋子氏(新14・英)

ミュージカル回転木馬(九月二十五日まで帝劇にて上演中)の翻訳者。

本学教授 後藤 祥子氏

*研究発表会 午前十時～十二時

——詳細次号——

◆右研究発表会での発表者を募集します◆

ご希望の方は、左記によりご応募ください。

(発表時間三十分、質疑十分)

・応募資格 本学国語国文学会会員

・応募方法 四〇〇字以内に発表要旨をまとめ、論題とともに申し込む。

・応募先 日本文学科学研究室内「国語国文学会秋季大会研究発表者募集係」宛

・締め切り 九月二十五日(月)

・選考方法 国語国文学会において選考、結果は後日、個別に連絡する。

日本女子大学国語国文学会

(平成6年度卒業生の会 決算報告 1995. 4. 30 現在)

前年度繰越金	956,187
会費	658,000
利子	7,785
図書販売	82,491
寄付	34,000

通信費	268,354
文具費	27,227
コピー代	26,030
名簿印刷費	250,000
会報印刷費	114,000
委員会活動費（委員会費）	18,273
（交通費）	36,000
ゼミ費	50,000
講演会費（講演料）	105,000
大会諸経費	23,286
発会準備金返済費（5回目）	100,000

繰越金 720,293

会計 安藤佳代子 (安藤) 保志美也子 (保志)

監査 荻窪昭子 

前年度繰越金	720,293
会費	600,000

通信費	250,000
文具費	30,000
コピー代	30,000
会報印刷費	180,000
新入会員名簿費	20,000
委員会活動費(委員会費)	40,000
(交通費)	40,000
(行事費)	10,000
ゼミ費	50,000
講演会費(講演料)	100,000
大会諸経費	50,000
新会員P R費	20,000
発会準備金返済費	100,000
慶弔費	10,000
予備費	390,293

計	1,320,293
---	-----------

- 一、本会は日本女子大学国語国文学会と称する。
- 二、本会は次の者を会員とする。

- 一、本会は日本女子大学国語国文学会と称する。
- 二、本会は次の者を会員とする。

3 日本女子大学文学部日本文学科(及び国文学科)・同大学院文学研究科日本文学専攻の専任教員ならびにもと教員

4 名誉会員

5 その他の関係者で会長の認めた者

三、本会は会員の研究推進と、相互の連携・親睦を計ることを目的とする。

四、本会はその目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 総会の開催
- 2 講演会・研究会の開催
- 3 見学・研修旅行の実施
- 4 機関誌「国文目白」の編集発行と配布
- 5 他の学会との交流
- 6 その他

その他必要な事業

五、本会には次の役員および委員を置く。

1 会長（一名）日本文学学科主任がこれにあたる。会長は本会を代表し、会務を総括する。

2 学科委員（若干名）専任教員をもって構成する。

3 回生委員（若干名） 回生の互選により会長が委嘱し任期は二年とする。但し重任を妨げない。

5 運営委員（若干名）学科委員・回生委員・学生委員それぞれの互選により会長が委嘱し任期は二年（但し学生委員から選出された者は一年）とする。

6 会計監査（二名）総会で会員から選出する。任期は二年（但し学生委員から選出された者は一年）とする。

六、本会は年一回総会を開催する。但し必要な場合は随時会長がこれを召集すること
ができる。総会は本会に関する重要事項を議決する。

七、運営委員会は会長が運営委員となり、本会の事業を計画しその運営にあたる。

八、本会の経費は会費、寄付金、その他の収入をもってあてる。会計年度は四月

より翌年三月三十一日までとする。

九、 本会の事務局は日本女子大学文学部日本文学科研究室に置く。

十、 本会則の変更は総会の決議による。

付則一 会費は当分の間、次の二本立てとする。

学生会員 専任教員 二〇〇〇円（国文）

一〇〇〇円（国文日白）講読料を含まな

を希望する場合は別途申し込むことができる）

二 会費は前納とする。

三 名誉会員は会費を納めないものとする。

四 本会則は平成七年五月二十五日から施行する。

四 本会則は平成七年五月二十五日から施行する。

平成七年度 研究サークル

○平安文学談話会

金曜日 午後五時半または土曜午後一時(年四回)

国文学科研究室

平安文学に関する研究発表後、談話会

・高野晴代

☎ 〇三(三三七〇)六八〇六

○皇女研究会

毎月第二土曜日 午前十時半

大学図書館共同研究室

皇女総覧平安朝篇の作成

・柳澤理恵子

☎ 〇四五(八四二)六五二五

楠木方

○古代中世文化論

毎月第四土曜日 午後一時半

国文学科資料室四二六

中世の芸術論

・山田佐和子

☎ 〇三(三九七二)四八四三

○中島斌雄先生の俳句を読みながら

毎月第三土曜日 午後二時 中島斌雄先生宅

中島斌雄全句集

・綾野道江

☎ 〇四四(九六六)五四二五

○卒業生の文学活動の跡をたどる—国文学科卒業生を中心に—『青踏』創刊頃の編集者について

土曜日 午後二時(年四回)

国文学科資料室四二六

・斎藤令子

☎ 〇三(三七八一)六三八〇

参加ご希望の方は、各サークル代表者に随時お申し込みください。

研究室だより —平成七年—

○例年になく雨がが多いようですが、皆様にはお変わりなくお過ごしのことと存じます。

○日本文学科では、本年三月に、定年により熊坂敦子先生が、ご健康のご都合により石綿敏雄先生がご退職になりました。約四十年の長きにわたって、本学および本学科の発展のためにご尽力下さいました熊坂先生のご退職を記念して、今年度の「国文目白」は特集号とし、発行は平成八年二月の予定です。なお、石綿先生には、本年度も非常勤講師としてご出講いただいています。

○本年度は専任教員に三名の先生をお迎えしました。高橋智子先生(近代文学)、田辺和子先生(外国人留学生特別科目)、藤原浩史先生(日本語学)の三名です。

○他の専任の先生方は、これまで通りです。

浅野三平先生(近世文学)

麻原美子先生(中世文学)

後藤祥子先生(中古文学)

倉田宏子先生(近代文学)

佐久間まゆみ先生(日本語学)

清水康行先生(日本語学)

源 五郎先生(近代文学)

谷中信一先生(中国思想史)

阿蘇瑞枝(上代文学)

専任は十二名となりました。研究室の運営や学生のお世話をしてくださっている助手さんは、植田恭代さん、桂千佳子さん、白石美鈴

さん、非常勤の助手さんは、田中愛さんです。
○国語国文学会の担当は、麻原先生と清水先生です。(阿蘇記)

◆文学散歩へのお誘い 10月28日(土)◆

—明治文学の名作の舞台を訪ねる—

江戸から明治にかけて文人の里といわれた根岸の子規庵(『病牀六尺』)を出発点に、芋坂を通過して谷中天王寺界隈へ。露伴の『五重塔』の世界、北原白秋の谷中時代を偲ぶ。更に鷗外の『雁』の主人公の散歩道無縁坂を経て、鏡花の『婦系図』の舞台湯島天神までを歩いて訪ねたい。

昼食は、鷗外が新婚生活を送りかつ「舞姫」を執筆した上野花園町の家を見ながらとする予定(水月ホテル鷗外荘)

なお、それぞれの近くにある書道博物館、芸大資料館、奏楽堂などを見学する。

(新妻記)

・案内 新妻佳珠子(新3)

・日時 10月28日(土)午前10:30

・集合場所 山手線 鶯谷駅北口改札口

・所要時間 約五時間

・費用 昼食代約千円、入館料約千円

・連絡先 企画係・平山静

(03・5398・3701)

・申し込み

10月19日～10月25日

平山まで、夜間にお電話を

お知らせ・活動報告

※学科名、日本文学科に

平成七年四月一日より、国文学科は日本文学科に、改称いたしました。それに伴い当学会の会則も、五月の総会で一部改正いたしました。改称についてのご質問にお答えいたします。

Q 学科名が改称されますと、国語国文学会名も変わるのでしょうか。

A 学会名は変更する予定はありません。国語国文学会のみです。

Q 私は「国文学部」を卒業しました。学科名が変わると、私どもも卒業科名を日本文学科としなければいけないのでしょうか。

A 卒業生の学科名は、卒業時の学科名のままでよいでしょう。日本文学科卒となるのは、平成七年度の卒業生からとなります。

(阿蘇瑞枝先生にうかがいました。)

※熊坂敦子先生名誉教授に

本年三月、国文学科を定年退職された熊坂先生が、六月名誉教授に推挙されました。

なお、国語国文学会では総会において、熊坂先生を名誉会員にお迎えしました。

※企画係 第一回文学散歩を楽しむ

平成六年十月二十五日(土)、鷗外文学のあとを訪ねる文学散歩を計画しました。当日は小雨ふるあいにくの日でしたが、鷗外記念室で、係の方のご丁寧な説明と豊富な鷗外の遺品の数々にふれ、充実した気分ですター。鷗外・漱石が住んだ通称「猫の家」跡、「青年」の主人公が歩いたS字坂、根津神社などを散策。

鷗外が『舞姫』を執筆した花園町の家を、ホテル側のご好意で宴会が終ると同時に見学できたのは幸いでした。

なお、予定外の横山大観記念館見学、正慶寺にある北村季吟のお墓に詣で敬意を表するハプニングは、最大の収穫とはある参加者の声でした。

(新3・新妻佳珠子)

※研究サークル

「古代・中世文化論ゼミ」

ゼミの中心は旧制の四十六回生(昭23年卒)。戦時中から戦後にかけて、本来四年間の修業年限が二年六か月に過ぎなかった。敗戦後の混乱期に勉強できたことだけでも幸運であったのは事実としても、「学び足りない」気持ちで母校を去った人も少なからずいたに違いない。

一九八九年五月に卒業生の自主ゼミ設立のニュースに、補習的な、ごく慎ましい気持ちでゼミは始められた。なぜ中世なのか、と聞か

れることがある。学生達は手をつけたがらないといわれるけれども、私たちなら時間をかけて「中世の世界」を読むことができるのではないかと思いますのである。

月一度当番も決め(八月は休み、現在までに『洛陽田楽記』『新猿楽記』『風姿花伝』『作庭記』『阿佛尼・うたたね/夜の鶴/庭の訓』が読み続けられて、昨年十一月ゼミ報の第一号を発行した。

また、昨年三月麻原美子先生にお願いして「幸若舞」についてお話をうかがった。おすすめにより、阿仏尼に取り組み一段落した時点で、再び麻原先生を囲み研究会を持ちたいと考えている。

四十六回生が多いが、他の回生の方々も参加しているので、多くの会員の参加をお待ちしている。

(旧46・山田佐和子記)



お知らせ

- 振替用紙を同封いたしました。本年度会費の納入をよろしくお願い申し上げます。
- 住所変更の方、大至急ご連絡ください。

一九九五年八月十日

発行・日本女子大学日本文学科
国語国文学会卒業生の会

平成六年 秋季大会

研究発表・公開講演会 報告

平成六年十一月二十五日(土)、国語国文学会午前の部(研究発表会)を泉山館第三会議室、午後の部(議事・公開講演会)を八十年館八五一教室において、開催しました。

研究発表は発表時間を長くしたこと、より充実したものとなりました。

午後の議事で、主任の阿蘇瑞枝先生より「国文学科名の変更」についての説明があり、それを受けて卒業生の会よりも変更についての会員への連絡などの経緯と、大会への返信はがきによる卒業生のアンケート結果を報告しました。

(1) 国際化時代の今日、変更は当然である 約30%

(2) 大変に残念だが、やむを得ないことと思う 約40%

(3) 懐しい科名、変更しないほしい 約20%

アンケートにこめられた一層の発展を祈って——という思いを伝え、拍手の中で議事を終了しました。

麻原美子先生には、数少ない幸若舞の研究者としての長年のご成果を、わかりやすい角度で捉え、解説いただきました。

た。

宮尾登美子氏には、戦後の満州での苦闘の日々、引揚げてから作家として世に出るまでを、また亡き国田百合子先生の学恩に応えるため、大学では初めての講演を引受けてくださったいきさつなどもうかがいました。氏のお人柄をも物語る、胸に迫る講演でした。

その後、生協食堂で宮尾氏も交え、懇親会を開き、充実した一日の大会を終えました。

(総務)

研究発表要旨

*当日発表の順に掲載させていただきます。

人麻呂における天皇神格化表現の確立

—歌集歌から作歌へ—

博士課程二年 八木京子

人麻呂の天皇神格化表現は、近年、人麻呂個人が時代的イデオロギーに乗じて切り拓いたであろう表現として捉えられ、主に作歌において論が盛んに行われている現況である。これは語彙のレヴエルでは「神ながら」の語を中心に論じられるのだが、この語は作歌のみならず歌集にも用いられているもので、その変遷過程を押

さえずに不用意に語ることの危険性を感じるものである。

本発表では、今一度丁寧に人麻呂歌集に詠まれる神と、また人麻呂活躍以前に詠まれていた神とを比較検討するという基礎的作業を行うこととする。そこでまず人麻呂歌集の神の様相を一通り眺めた上で、一般信仰に帰すことの可能な神の像を見定め、また改めて視点を転じて、作歌に現れる神表現の新しさ、特殊性を見渡すという法をもって人麻呂の神表現を明らかにすることを目標とする。その中で「神ながら」の語がどのように現天皇への讚美表現となり得たのかを確認したい。

近代文学の中の〈子ども〉

—明治期少年文学を中心に—

目白学園短期大学専任講師・院21 久米依子

明治の少年文学は博文館『少年文学』叢書(明24)によって本格的に開始され、さらに同社から発刊された雑誌『少年世界』(明28)の小説群に受け継がれて発展していく。

その流れを辿ると、近代的な〈子ども〉観の成立——〈大人〉とは異なる存在としての〈子ども〉という捉え方——が、諸作品の中で徐々に確定されていったことが理解される。

具体的には、作中の性的事柄の隠蔽や、大人に逆らえない無力な子ども像が描かれ、それに

よって〈子ども〉と〈大人〉の区分がよりゆるやかであった、前近代的な観点が刷新されたと考えられるのである。

さらに明治少年文学は、国家主義と結託した空想的な戦争・冒険物語も多数生み出していった。そこでの〈子ども〉は、国家と結びつくことによって大人をものぐ活躍をするようになる。逆にいえば〈子ども〉は、国家のような強大な後ろ盾がなければ力を発揮できない者とみなされていたのである。

やがて戦争の時代が去ると明治的少年文学は衰え、〈子ども〉は無力な存在として取り残されることになる。大正期の児童文学は、〈大人〉とは完全に隔たった無垢な、弱者としての子ども像の描出に専念することになるのである。

授業実践

―ばなな、春樹、夏生を読む生徒にとって、樋口一葉の世界はどう映るのか―

新24 麻生和子

今年で教員生活十八年が経ち、三度めの高三担任で、高三の授業を現代文と古典と担当している。高三ともなれば、三年間のおつき合いでこちらとの関係も密接になり、授業でいろいろな本を紹介すると関心を持ってくれる。時には、彼女たちが感動した本（ちなみにこの夏は『マディソン郡の橋』や『ピンク色のチョコレート』

だった）を気軽に貸してくれる。そんな血の通い合った関係を大事にしながら授業を進めていく。

さて、三年の二期に、普段の読書傾向とは異なる作家（樋口一葉）の日記を授業で扱うのであるが、どのように関心を持ってもらい、一葉の他の作品に触れさせようか、あれこれ頭を悩ましながら、授業を進めていく。過去に教えた資料を基にして、今年新たに発見し、考えたことを中心に、現代高校生気質が見え隠れする実践報告をする。

公開講演会

*午後行われた公開講演会の要旨を、発表の順に掲載させていただきます。

舞の本と法華経

本学教授 麻原美子

私は大学院で、『平家物語』の受容について研究をいたしました。『平家』は語り物だから、語るたびに異なるため伝本が多い、というのが当時の通説でしたが、そんなことがあるだろうか。日本の芸能の伝承というのは師匠から口移しで教えられ、一言半句変わらないように練習していくものではないか。『平家』がどう語られてい

たのか、伝統の継承と新たな創造という大きな問題を大学院で研究したわけです。

そうした受容の研究を進めていって、曲舞、幸若舞、舞の本に突き当たりました。当時誰もやっていない研究で、それなら時間をかけてやろうと思い、『平家』の研究と併せてやりまして、今回、岩波新日本古典大系の中に、初めてそれを入れていただきました。やっと市民権を得たわけで、嬉しいことです。

物語が庶民に享受されるには、果報目出度き物語であるという面が重要です。舞の本は最後に必ず「末繁盛の物語」とか、世の中がよくなったという話があり、果報目出度き物語です。

曲舞というのは白拍子舞に対する語で、白拍子とは一風変わった拍子の舞ということで、中世では曲舞とも幸若舞ともいわれています。観阿弥、世阿弥の能の大成者たちが、曲を能に取り入れたといわれています。この曲舞というのは、舞の本とは開きがあり、室町の中期のそれは短い謡だったのではないかと考えています。それが次第に、叙事的な語り物が流行り、『平家物語』が平家琵琶によって語られるようになって、叙事的な語り物が語られるようになり、今日の幸若舞になったと考えられます。

本来、曲舞の太夫は身分が低く、寺社に隷属した声聞師が演じていました。幸若舞を語る太夫も身分は低かったでしょうが、芸で身を立てる専門の舞太夫も登場し、戦国大名にも召しかえられるようになり、内裏でも演じられますが、次第に読み物としても読まれるようになり、

江戸の初期になりますと、語るといふより版本として皆が読むようになり、舞の本という呼ばれ方をするようになります。

さて、舞の本の特質として、仏教的性格が顕著で、特に法華經の經文そのままの引用が目立ちます。また、法問答と説教が目立ちます。

法華經と文学の関わりについてざっと申し上げますと、法華經は伝来後、平安時代の貴族社会に受け入れられ、『采華物語』などでご存じのとおり、極楽往生を願った貴族はその書写に励みました。やがて、法華經を信ずることによってよいことがあったか、法華經受容者の話が収められた『本朝法華驗記』、『百座法談聞書抄』、『探要法華驗記』など、人々の目が法華經に向けられていたことを物語る書物が現れます。

受容され、靈驗が隔々まで浸透していきますと、それを歌によむことが盛んになります。いわゆる『二十八品歌』などは教典の意味を理解し、教理の理に関わっています。有名な『梁塵秘抄』や『山家集』に法華經の二十八品歌があります。

能にも取り入れられます。往生できない幽霊が、法華經の読唱によって往生したとされます。舞の本の法華經の受容は、情感に訴える能と違い、教理、教論中心で、談義色が濃厚になっています。

説教談義の傾向はどこから出てきたのか。法華經の注釈は聖徳太子の昔から代表的な經典として盛んでしたが、十五世紀半から十六世紀半までに六十箇所くらいの寺で研究され、学僧栄

心は柏崎に寺を開き、法華經の談義をします。各地から僧が集まって談義すると同時に、そこで各地の情報が収集され交換されます。『法華經直談抄』はその談義をまとめたものです。舞の本を読みますと、そうした談義の世界との関わりが否定できません。

やがて北陸には一向一揆が吹き荒れ、京では念仏と法華が対立してきます。舞の本はそうした宗教戦争のさなかに生まれ育った文芸、芸能です。芸術と宗教の問題、舞の本に現れる女人結界のことなど、またの機会に譲ります。

(文責・編集部)



平成七年

秋季大会・公開講演会のご案内

日時・平成七年十一月二十五日(土) 一時～
講演者 翻訳家 酒井 洋子氏 (新14・英)

ミュージカル回転木馬(九月二十五日まで帝劇にて上演中)の翻訳者。

本学教授 後藤 祥子氏

* 研究発表会

午前十時～十二時

— 詳細次号 —

『蔵』『クレオパトラ』にみる

女性の生き方と私

作家 宮尾登美子

ずいぶん昔のことになりますが、若いころ、是非こちらで勉強させていただきたくて、東京遊学を決めておりましたが、戦争が激しくなり、断念せざるを得なくなりました。今日までの人生の中で、もし私が御校で勉強させていただいておりましたら、運命は随分変わっていて、小説など書いていなかったといつも思います。

私が『天璋院篤姫』を書きます時に、こちらの国田百合子先生に女房詞のことでご指導をいただきました。その折、青木生子前学長にもご紹介いただき、また一番ヶ瀬康子先生、小川信子先生に非常に仲良くしていただくなど、ご縁がございます。

こちらへの進学を断念し、昔は女学校の上に専攻科というのがございまして、そこへ進み、卒業後、昨日までは学生だったものが、今日は山の中の小学校の教員となり、子供と一緒に遊んでおりました。そこで出合ったのが、最初の主人で、結婚して、十八歳で長女を産みまして、主人と共に満州へ渡ったのが、もう終戦の二十年でした。生れて五十日めの長女をおんぶして渡ったのですが、終戦になって、学校は閉校となりました。

本当におぼつかない毎日で、明日の命がある

かどうかというふうでした。とにかく、電気も水道もない開拓地の小学校でしたので、情報はまったく入りません。そこに暴民が押し寄せて来ましたが、中国人に助けられて、着のみのままでは宮城子という日本人の難民収容所になっている炭坑へ逃げ込みました。これが終戦の年の九月六日で、私にとっては一生忘れられない日です。それから一年間、炭坑で私共は地獄の底で生きているようでした。人が死んでも死骸を地面が凍っている時は埋葬できず、春になって地中に埋めるといふ、人間として悲惨の極みでした。このような状態では、人間性を全部失ってしまうと思います。

私が九死に一生を得て、引き揚げて来ましたが、昭和二十一年の九月二十一日でした。帰り着いたのが高知県の主人の実家で、農家でした。一所懸命姑に付いて農業をしていましたが、二十二年に肺結核を宣言されました。

間もなく死ぬかもしれないと感じましたが、怖さはありませんでした。やっぱり若さだったのかも知れません。その時人間として、しておかなくてはならないことがあるのではないかと考えた時に、満州の地獄のような難民生活の一年を子供のために書き残しておいてやろう、これが親としての義務じゃないかと思いました。子供が困難にむかった時、自分はこのような苦しい条件を乗り切った時、自分はこのような苦しい条件を乗り越えて来たんだと思い、勇気を奮いたたせてやれたなと思いました。ですから日記みたいなものから始めて、毎日の感想、自分の考えたこと、その日の出来事とかいうふ

うなものを書きはじめたのが、これが私の小説の書き始めなのです。私はずっと日記を書き続けて、一種の精神的衛生を保ってまいりました。それから小説を書いて、志を持って世に立っていきたいと思いついてから、世に出るまで二十六年間かかりました。同人雑誌に加わるひまもなく、何もかも一人で勉強して、今日まで師匠もなく自分で考えてやって来しました。

その私が作者になりましたのは、昭和四十八年『權』で太宰賞を貰いましてからで、以来作家として税金を納めております。志を捨てず、書きたいものを胸にためてきました。

『きの析』については、お話をしたいと思っています。昭和二十八年頃、今の団十郎さんが小学校に入学した時の写真に、お母様が一緒に写っていて、その地味なお母様の姿を見て心に芽生えましたのが「書く」ということです。朝日新聞で『序の舞』の次にこの『きの析』を書きたいと思いました。団十郎さんは、母のことを書いてくれるのは良いが、その脇で父が非常に評価を落すのは困るということでOKをしてくれませんでした。団十郎さんにお会いして、「悪いけど、私書かせていただく。書かないでくれということがあったら言うてください。そのことだけは、あなたとの仁義で私は書きません。」とお会いた席で言ったのですが、団十郎さんは何も言わない。交渉決裂でした。私は告訴も覚悟しつつ、それでも書きました。告訴はされませんでした。が、嫌がっているものを書いたのですから、団十郎さんへの気持ちとして生涯ドラマ化は致しませ

ん。私の十七作の中で唯一ドラマ化しないのがこれです。

クレオパトラは小さい時から私の書きたい一人だったのです。何故私が彼女が好きかというと、女王様というのは、非常に魅力があります。富や権力が、全部自分の手の中にあるのですから。しかし私が書きたいのは、一国の文化を背負っていて、しかもその文化が非常に魅力のあるもので、生涯がドラマチックな人といったら、クレオパトラを置いて他にありません。資料が多く、何を食べ、夜寝る時は、どんなふうだったかも把握していないと、人間像は描けません。『蔵』の話は、私の十七作目の作品でして、唯一モデルがありません。私は前から世界に冠たる、日本酒の酒造文化といういなせな純日本的なものを書きたいと思っていました。

主人公の烈は、私のイメージの生み出した女の子です。周りに配列した人間は、全部私が作り出した人々です。では荒唐無稽の物語かという、そうではなく、やっぱり私の人生の結実です。『蔵』を書くとして、それぞれの人生を考えた場合に、私が六十八年間生きて来た生き方を烈に生かそうとか、姑の言葉を借りてこようとか、これまでの日々が実りました。ですから、架空の人物ではあっても、全部どなたかが投影しているということです。

そして、皆様に私の本を読んで、「自分も頑張ろう。いい人生を頑張って生きよう。」と、思っていたことがありましたら、私はもう作者冥利に尽きると思います。(文責・編集部)